

施光恒・黒宮一太編『ナショナリズムの政治学：規範理論への誘い』

森, 敦嗣
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19489>

出版情報：政治研究. 57, pp.105-106, 2010-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

紹介

施光恒・黒宮一太編

『ナショナリズムの政治学―規範理論への誘い―』

(ナカニシヤ出版、二〇〇九年四月、x十二〇〇頁)

七〇年代生まれの若手研究者達によって書かれた本書は、戦後の彼らより上の世代には忌避されがちであったナショナリティや国民国家を、社会的統合や共同性をもたらすものうち、もつとも重要かつ現実的なもののひとつとしてとらえる。そして、その位置づけや良し悪しを吟味すべき課題であるとして理解する。その上で、規範理論的観点から、ナショナリティや国民国家をとりまく問題を議論する枠組みを示し、現実政治を論じる際の理論的導きを供給すること、およびナショナリズム研究を志す人々への誘いとなることを、本書の目標として掲げている。

第一章(黒宮一太)では、ナショナリズムの起源について考察されている。ナショナリズムやネイションを、近代的な現象とみなす近代主義と、近代以前からの歴史的形成や文化的語法の連続性によるものとみなす「エスノ・シンボリズム」との間の起源をめぐる対立について言及し、近代という時代

の捉え方の相違をめぐる対立があると指摘する。

第二章(佐藤一進)では共和主義とナショナリズムとの共通要素や相違点を探ることで、ナショナリズムのもつ使命を明らかにすることを試みる。

第三章(柴山桂太)は、メディアとナショナリズムの関係性を、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』を手がかりに、近年のメディア環境の変化を視野に入れつつ論じる。出版メディアが国民を想像するうえで重要な役割を果たすというアンダーソンの分析に加え、その出版メディアで用いられる国語の形成と発展が、ナショナルな同胞意識を生み出すにとどまらず、複雑化する社会の要求にこたえる思考と表現の規範をつくり出すということを指摘している。

第四章(施光恒)では、グローバル化の進展のなかでナショナリティの規範的意味をリベラル・デモクラシーの観点から肯定的に評価しつつ、ナショナリティを共有しない他者やマイノリティにも配慮する議論であるリベラル・ナショナリズム論が取り上げられている。リベラル・ナショナリズム論の意義を示すとともに、リベラル・ナショナリズム論がリベラルであるための要件、つまりナショナリズム的要素に対し、「公正さ」という観点から求められるリベラルな制約についても明示している。

第五章（神島裕子）は、相反すると考えられているリベラル・ナショナリズムとリベラル・コスモポリタニズムのグローバルな地平における全ての人の福利への対応についての論争を検討し、両者がグローバルな地平における基本的人権の保障をグローバルな正義の課題とすることで一応の決着に行き着くことを示す。

第六章（松元雅和）は、ナショナリズムと対置される多文化主義についてとりあげ、両者の議論が排他的であるか、両立可能であるかを問う。そこで一国内でのエスニック文化の多様性に対する対応として、三つのナショナリズムの観点を提示し、先の問いについて複数の解釈が可能であることを指摘する。

第七章（栗田佳泰）では憲法とナショナリズムの関係を整理して抽出する「国家の中立性」について、現実性の観点と公正さの観点から問題があることを指摘し、それにならしてリベラル・ナショナリズムの見方が役立つことを示し、その見方が憲法学に及ぼす影響について考察している。

第八章（竹島博之）では公共精神の欠如や規範意識の低下がいたるところで生じる現代世界の状況を踏まえた上で、その問題を対処する機能をもつ公教育とナショナリティをめぐり論争があることを概観している。さらに英米の規範理論に

おいてナショナルな教育がコスモポリタンの教育と多文化教育、宗教的原理主義から批判をうけつつ、自らの議論の修正を行っていることを述べる。

第九章（塩出浩之）では近現代史の日本におけるナショナリズムについて、社会の秩序形成とのかかわりという観点から考察を試みている。日本では戦前に比べ、戦後は「国家」による「公」の独占という形でナショナリズムが秩序形成意識としての役割を果たさなくなった。グローバル化する今後の日本では、増加する国外からの移民やエスニック・マイノリティをいかにネイションに位置づけていくかが不可避の問題であり、「日本人」であることの意味を問い直し、再定義を試みるべきではないかと提案している。

本書はそれまで社会学や歴史学、人類学などの諸学において「叙述的に」議論されることが多かったナショナリズムを、政治理論・哲学の観点から——つまり「規範的に」——論じる必要性を正面から主張するわが国における最初の学問書だといえる。今後、たとえば東アジア共同体構想の是非など、ナショナリティや国民国家に対する規範的議論がますます活発となることが予想されるが、本書は、そうした議論を先導する役割を果たしうるものだと思われる。（森 敦嗣）